

## 韓国・朝鮮編の生活絵引編纂と図像資料

—「平壤監司饗宴図」を例にして—

金 貞我

### はじめに

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム第 1 班の課題は、図像を生活文化研究のために資料化し、体系化することである。その具体的な取り組みは絵引編纂であり、日本常民文化研究所の研究成果である『絵巻物による日本常民生活絵引』（1964 年）を継承し、新たに日本近世編の生活絵引を作成する一方で、絵引編纂の対象地域を東アジアに拡大し、中国編、韓国・朝鮮編の生活絵引を作成することを課題目標としている。なかでも、韓国・朝鮮編の生活絵引制作においては、朝鮮時代に制作された絵画資料を中心に資料の収集を続け、その分析を積み重ねてきた。

そこで、本報告では、韓国・朝鮮編絵引編纂の過程と図像資料に関して次の 2 点について報告する。まず、ひとつは、朝鮮時代の生活絵引編纂のために今まで収集してきた図像資料の状況を説明しながら、絵引編纂資料と取り上げる風俗画資料について述べ、朝鮮風俗画による絵引編纂の実例を紹介する。そして、もうひとつは、絵引編纂資料の中から、18 世紀後半の制作と推定される「平壤監司饗宴図」を取り上げ、朝鮮時代の地方都市平壤とその文化の読み解きを試みたい。絵引編纂資料のほとんどは特定の地域性が明確に表れているとはいえないが、「平壤監司饗宴図」は、平壤という地方都市を主題とした、いわゆる都市図の系譜を引く作例である点で、特に注目される。

「平壤監司饗宴図」の作品資料については、2006 年に 2 回にわたり韓国の国立中央博物館において直接調査する機会に恵まれ、国立中央博物館の好意により精細なデジタル図版を提供していただいたことを特記しておく。

### 1. 韓国・朝鮮編絵引編纂のための図像資料と風俗画

#### (1) 朝鮮時代の図像資料

COE 1 班では図像資料から生活文化の情報を引き出し、韓国・朝鮮編の絵引を制作するために、今まで様々な図像資料を博捜してきた。特に『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂資料である日本中世に制作された絵巻物の風俗表現に注目し、それに匹敵する朝鮮時代の図像資料の収集に重点をおいてきた。周知のように、『絵巻物による日本常民生活絵引』では、日本中世に制作された数多くの絵巻のなかでも、特にいきいきとした写実表現を特徴とする、いわゆる男絵系統の作品が編纂資料として取り上げられている。

しかし、朝鮮時代においては、生活の実態を図像で表わした資料は意外に乏しく、図像で示された絵日記、挿絵を伴う旅日記類は管見の限り見当たらない。図像を伴う農書、技術書などの場合も、例えば『農事直説』（1429 年）、『海東農書』（18 世紀末）の場合にもその挿絵の殆どは農作業と農具の図解に近いもので、日本の農書や絵日記、旅日記などにみる豊かな写実表現とはその性質を異にする。また、朝鮮時代に制作された記録画としては、「華城陵幸図屏」、「王世子入学図帖」、「華城城役儀軌図」、「耆社宴会帖」などがその代表的な例として挙げられるが、それらは、儒教の理想に従い王朝の儀礼や宮廷や官衙の公的行事を記録した儀軌図、

または、士大夫の公的・私的行事と関連した契会図、宴会図、雅集図などが中心である。

実際の庶民の生活を主題とし、農工商の生活の営みや市井の町並みをもっとも豊かに表わした図像資料は、朝鮮時代に「俗画」と呼ばれた風俗画である。朝鮮時代の風俗画制作の担い手は宮廷に属していた画院画家であったが、朝鮮時代中期以降、この画院画家の主導の下で民衆の市井雑事や平凡な日常生活を主題とした多彩な風俗画が制作されるようになった。こうした風俗画は、民間工房の風俗画制作にも影響を与え、後期になると、実際の生活の場面に即した生動感あふれる作品が量産されるようになる。

(2) 生活絵引編纂資料と朝鮮時代の風俗画

韓国・朝鮮の生活絵引を編纂するための素材として、人間の世俗や生活の営みをリアルに反映した作例として、現在、今年度の編纂目標として、次の5点の風俗画資料に注目し、絵引作成を進めている。

- ①申潤福「蕙園傳神帖」(30葉、潤松美術館蔵)
- ②金弘道「檀園風俗画帖」(25葉、国立中央博物館蔵)
- ③「耕織風俗図」(8曲、漢陽大学校博物館蔵)
- ④「平生図」(8幅、国立中央博物館蔵)
- ⑤「平壤監司饗宴図」(3幅、国立中央博物館蔵)

これらの風俗画は18世紀半ばから19世紀初め頃の間制作されたもので、時代はそれほど隔てられていないが、風俗表現などにおいて、細かな時代ごとの変化がはっきりと読み取れるなど、いずれも朝鮮時代の生活を表わす内容を仔細に、写実性豊かに描いている。

特に申潤福筆「蕙園傳神帖」(図1)と金弘道筆「檀園風俗画帖」(図2)は、その内容と表現力において、日本の絵巻物と比較しうる、同時代の生活をもっとも豊かに表現した風俗画として評価され、韓国・朝鮮編絵引編纂資料の中心をなすべき作品として注目される。また、漢陽大学校博物館蔵「耕織風俗図」(図3)の場合は、生業の場面をリアルに描いた図像資料が少ないなかで、朝鮮時代の農作業の場面や女性の労働などを描いている点において貴重な資料になるといえる。「平生図」(図4)は、一生の通過儀礼を物語的に描いたもので生活と密着している場面が多く、儀礼の様子が窺える点、興味深い資料である。いずれも絵引編纂資料として事実性を反映する度合の高い作例として注目してきた(絵引作成の実例は図1-1、図2-1、図3-1、図4-1を参照)。



図1 申潤福「蕙園傳神帖」潤松美術館蔵  
『蕙園傳神帖』探求堂、ソウル、1974年

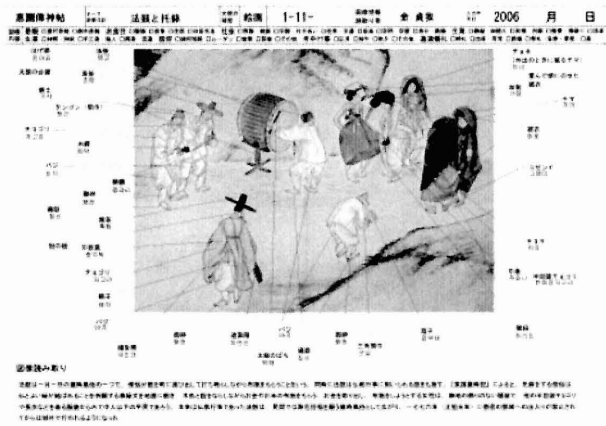


図1-1 絵引き作成の実例



図2 金弘道「檀園風俗画帖」国立中央博物館蔵  
 (『檀園風俗画帖』探求堂、ソウル、1971年)

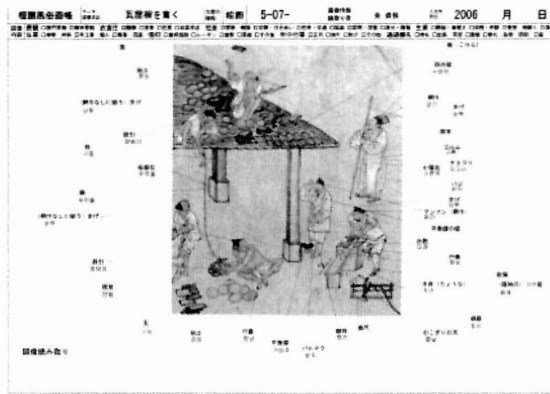


図2-1 絵引き作成の実例

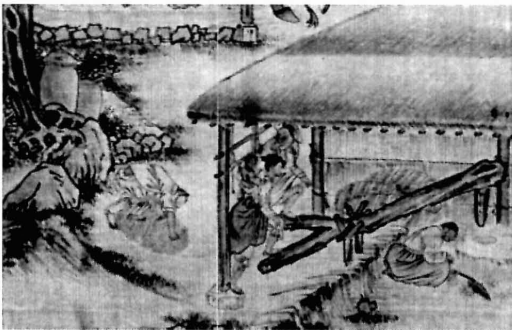


図3 「耕織風俗図」部分図 漢陽大学校博物館蔵  
 (筆者撮影)

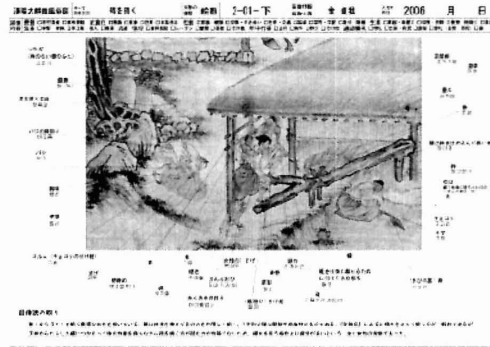


図3-1 絵引き作成の実例



図4 「平生図」部分図 国立中央博物館蔵  
 (『朝鮮時代風俗画』、国立中央博物館、ソウル、2002年)



図4-1 絵引き作成の実例

しかし、このように朝鮮時代の風俗画を例にしても、日本の中世に制作された絵巻物のように様々な生活場面が豊富に盛り込まれた絵画資料は、残念ながら、非常に少ない。5つの絵画資料の中に、画帖形式の作

品が「檀園風俗画帖」と「蕙園傳神帖」の2作例、そして屏風仕立ての「耕織風俗図」と「平生図」は大画面形式ではあるが、図像から引き出せる情報量は、巻物に比べるとはるかに少ない。さらに、ストーリーの展開があり、内容からも社寺縁起、高僧伝、説話類といった、さまざまな状況や行為が登場する日本中世の絵巻物と比較をすると、朝鮮時代の生活の記録は、かなり限られたものになるが、だからこそ、現存する朝鮮時代の風俗画は当時の生活文化を考える上で極めて貴重な資料であるといわざるをえない。

以上、朝鮮時代に制作された一連の風俗画が韓国・朝鮮編生活絵引編纂に重要な素材になることについて言及した。続けて今回の報告では、そのなかから「平壤監司饗宴図」を取り上げ、絵画資料検証の一例を提示する。「平壤監司饗宴図」は、絵引編纂資料として、平壤の地方文化を考察する上で重要な作例でありながら、美術史研究からの詳細な報告も比較的少なく、制作年代や個々のモチーフに対する仔細の検討から主題の解釈まで、なお不明な点が多い。特定の都市を描くいわゆる都市図の制作は、朝鮮時代には決して活発ではなかった。北宋の張擇端による「清明上河図」とその系統を引く中国における都市図の制作、また日本の近世に量産された洛中洛外図の作品の形式や現存する遺作の量をみると、朝鮮時代に制作された都市図の作例は比較にならないほど少ない。そのような現状のなか、釜山東萊府を背景に日本からの使臣の行列や饗宴の場面を描いた「東萊府使接倭人使図」、漢陽（ソウル）の西大門外に広がる京畿官営を描いた「京畿官営図」とともに、「平壤監司饗宴図」は朝鮮時代の都市図の系譜を引く作例としても注目に値する。

## 2. 「平壤監司饗宴図」について

### (1) 「平壤監司饗宴図」の概要と平壤図の流行

現在、韓国国立中央博物館が所蔵する「平壤監司饗宴図」は、全3幅で、それぞれ「月夜船遊」、「練光亭宴会」、「浮碧楼宴会」という小題が付されている（図5, 6, 7）。第1幅「月夜船遊」は、月夜の大同門前の大同江で監司の赴任を祝う饗宴の様を描いている。大同江から平壤城を眺める方向に、監司赴任を祝う夜の饗宴が繰り広げられる。第2幅「練光亭宴会」は平壤城内から大同江に視線が向かっている。大同門に入った付近の賑わう町の様子は「清明上河図」系統の中国の都市図を連想させる。浮碧楼での饗宴の様を描く第3幅「浮碧楼宴会」も、「練光亭宴会」のように楼閣から大同江を眺める視点で描かれており、右端の永明寺の向かい側には大同江に浮かぶ綾羅島がみえる。永明寺境内から白雲橋・青雲橋と呼ばれる石の階段を上がったところに浮碧楼が建つ。朝鮮時代の初期に制作された木版本「平壤官府図」をみると、平壤官府のほぼ正面に描かれる大同門から平壤城壁をそって練光亭が続き、さらに北へ進むと綾羅島の向かい側に浮碧楼が位置するが、「平壤監司饗宴図」は平壤の名所として名高い大同江や永明寺をクローズアップしながら、平壤城とその周辺の景観をまともよく取り入れている。

紙本彩色、法量は各71.2×196.6cm、横に長い巻物の一部分のような形状であるが、現在は額縁装である。「檀園写」との落款・印章が第3幅「浮碧楼宴会」の右端に記されているが、金弘道の真筆とされる「檀園風俗画帖」の運筆にみる肥瘦に富む線描は見られない。現存する平壤図は、平壤内外を俯瞰的に捉えた多色刷りの絵地図か、木版刷りと肉筆彩色を併用した作例が多い。その理由は、朝鮮時代の18世紀半ば頃から平壤図を求める一般の人々の需要が増え、版画の平壤図が多量に制作されるようになり、朝鮮時代末期まで広く流布して親しまれたことによる。「平壤監司饗宴図」にみる変化のない一定幅の線描は、このような木版刷りの線描を連想させ、木版刷りの平壤図を肉筆で模写したような趣が感じられる。しかし、背景の山水の表現は、建造物の表現にみる界画手法や人物描写とは異なり、山水画技法に相当の技量を持っている画家の筆

跡が認められる。

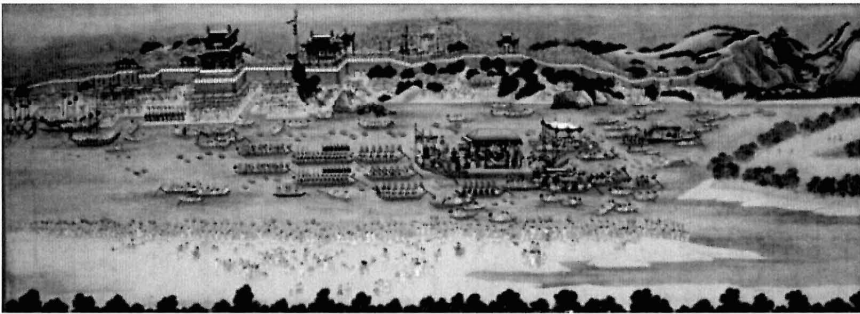


図5 「月夜船遊」(『平壤監司饗宴図』) 国立中央博物館蔵  
(国立中央博物館提供)



図6 「練光亭宴会」(『平壤監司饗宴図』) 国立中央博物館蔵  
(国立中央博物館提供)

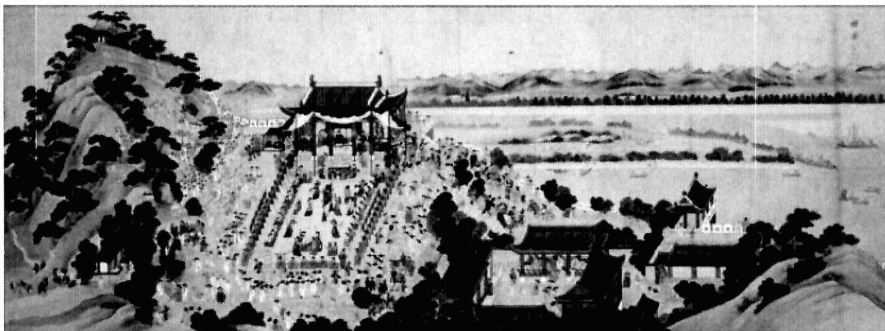


図7 「浮碧楼宴会」(『平壤監司饗宴図』) 国立中央博物館蔵  
(国立中央博物館提供)

さて、画院画家金弘道の筆に帰せないのであれば、「平壤監司饗宴図」の制作はいつ頃と考えられるのだろうか。作品に則しながら検討していくことにする。

平壤は、朝鮮半島の建国神話の古朝鮮の都として、また、高句麗の首都として古代から重要な都市とされてきた。高麗時代には西京とよばれる関西地方の中心地ではあったが、中央からは疎遠にされ、南の三南地方に比べると人口も少なく、辺鄙な地域であった。朝鮮が建国されてから積極的に移住政策が実施されることにより、人口が徐々に増えて、古代の都だった平壤の活気を取り戻すようになった。朝鮮が建国されてから平壤府とされ、監察使が置かれて朝鮮北部の行政・軍事を統括する中心的な都市として機能した。朝鮮と明の外交使臣が通る使行路の中心地でもあり、特に朝鮮時代中期以降は対清貿易に従事する商人や両国の外交使臣が通る外交の要地として繁栄した。

しかし、平壤はなによりも、古くより名勝地としても名高い場所であった。平安道文人の詩話書である『西

京詩話』にもその美しい景観が多数読まれている。また、明の使臣の詩文集である『皇華集』の中にも平壤の景勝と遺跡を賞賛した詩が圧倒的に多く、その中でも練光亭、挹瀨楼、浮碧楼、牡丹峰などの名所は数多く詠まれている。

平壤の景勝地は、詩文にのみならず、絵画化されているのが、『李朝実録』に確認できる。

『朝鮮画論集成』によると、15世紀頃に平壤の名勝十景を絵にした「題岐城十景図」が制作されたことが知られ、その後も『李朝実録』にはしばしば平壤の楼閣や景勝を描いた屏風絵が制作された記録が伝わる。他にも「関西名勝帖」、「西京名勝帖」といった題目の作例が確認されることから、画帖形式の平壤図も制作されたようである。

しかし、平壤城は、壬辰倭乱（文禄・慶長の役、1592-1598年）と丙子の胡乱（1637-1638年）のあと、修復が100年ほど行われず、町は荒廃したまま放置された。私撰邑誌『平壤誌』及び『平壤続誌』に記載される平壤城や名所の建造物の修復・再建は、英祖（1724-1776年）～正祖（1776-1800年）頃である。それは、おおよそ北城が築城されて平壤城の規模が拡大される1714年以降、英祖9年（1732）に始まり、その後、浮碧楼、正陽門、普通門、待月楼など、各名勝地の建造物が順次修復・再建される。

平壤図が再び流行した時期は、平壤城とその周辺の景勝地の楼閣などが再建される時期とほぼ一致する。18世紀半ば頃からは、平壤城や町並みの景勝地が多く絵画化され、『正祖実録』が伝える平壤図の制作は宮廷で盛んに行われたようである。その需要は宮廷や支配階級のみならず、民間にまで拡大され、画院画家が制作した原画をもとに木版刷りの平壤図が多量に複製され、消費された。「平壤監司饗宴図」の筆づかいを詳細にみると、描線はほとんど変化のない一定の幅で、建造物を描く際によく用いられる界画手法を連想させるが、木版刷りと彩色を併用した現存する平壤図の作例をみると、「平壤監司饗宴図」はこのような木版刷りの平壤図を肉筆で模写したもののように見受けられる。

「平壤監司饗宴図」の制作時期を窺わせるもうひとつの手がかりは、同作品に描かれた城壁や各種の建造物の位置関係などである。平壤城は、大同門から西北の万寿台にいたる内城、大同橋から南の中城、大同江と普通江で包まれた外城、そして北の牡丹峰を中心とした北城の合計で四つの城で構成されていた。その中でも北城の築城はもっとも遅く、1714年に建造され、城壁が廻らせられる。18世紀半ば以降制作のソウル大学奎章閣蔵肉筆彩色画「箕城全図」や個人蔵彩色写本「箕城図」、個人蔵木版刷り彩色本「平壤図屏風」などには、平壤北城の城壁がはっきりと描かれているが、1714年以前に作成された「平壤官府図」には北城の城壁が示されていない。ところが、「平壤監司饗宴図」には北城がはっきりと描かれている。また、浮碧楼と牡丹峰、そして永明寺と八角五重塔などの位置関係は、「平壤官府図」と一致する点は興味深い。さらに、画面上部に描かれる山水表現が1770・80年代の山水表現の主流であった鄭鄞画風の米点であることを考え合わせれば、「平壤監司饗宴図」は、概ね18世紀後半の制作と推定できるだろう。

## （2）「平壤監司饗宴図」が語るもの—官衙服飾と地方演舞

それでは、平壤を描いた絵画資料から読み取れる地方文化をとりあげて、特記すべき点をいくつかみることにする。3幅からなる「平壤監司饗宴図」は英祖50年（1774）に、申光洙が平壤監司に赴任した親友の蔡濟恭に向けて、遊興の町として名高い平壤で享楽に陥ることなく政事に専念することを戒めるべく著した『関西楽府』の絵画化であるとされる。しかし、「平壤監司饗宴図」には『関西楽府』の本来の意図とは裏腹に贅を極めた赴任の模様とそれを祝う宴会が設定されている。

3幅の絵には、赴任に伴う随行人、宴会に参列する地方官衙の両班の他、官衙の下級官吏、宴のための樂

工、官妓、そして、見物に訪れた様々な身分の人が大勢描かれている。人物それぞれの服飾には、両班や庶民、小児と冠礼を済ませた少年などといった異なる身分ごとの特徴がはっきりと描かれている。特に、官吏の服装と官職に関しては、地方官衙の服飾風俗の宝庫ともいえるほど綿密に描かれている。官吏の服飾と官職については、ほぼ同時期に黄海道のア陵に地方官僚が赴任する様子を描いた「安陵新迎図」(中央博物館蔵)が参考になる。それに照らして分析すると「平壤監司饗宴図」の個々の人物描写は、かなり小ぶりではあるが、身分による服飾の異なる特徴ははっきりと表現されている。たとえば、平壤監司や守令、裨将、座首、別監、衙前、軍校の将校、使令などが確認できる他、宴会に伴う樂工、吹打手、官妓、舞妓、そして官奴、水汲婢の服飾など、地方官衙に属する様々な階層の身分やその服飾が読み取れる。特に女性の服飾に関しては、漢陽では、常班女性の身分の分別として、両班の女性は下半身をおおうチマを右に回して紐で止めるが、下層の婦女、妓女はその反対の方に回すという着衣法の差異があった。しかし、『平安南道誌』によると、平壤では身分に関係なく、チマは右に回して着たという。「平壤監司饗宴図」に登場する女性は右または左回しであるかの区別はなく、当時漢陽では身分の分別として厳しく守られていたことが平壤では無頓着であったのか、または、表現が省略されたのが、今後、さらに検討を要する。



図8 「練光亭宴会」部分図  
(『平壤監司饗宴図』) 国立中央博物館蔵  
(国立中央博物館提供)



図9 「浮碧楼宴会」部分図  
(『平壤監司饗宴図』) 国立中央博物館蔵  
(国立中央博物館提供)

女性の表現のなかでも、饗宴図という主題ともっとも密接な関係を持つ登場人物は、妓女であろう。妓女は宮廷や上流社会の宴会に歌舞を提供し、妻を帯同せずに辺境に赴いた軍人や地方官僚に侍寝することがその役割であった。絵のなかには、加里磨と呼ばれる四角い被り物を被っている妓女が描かれているが、それは官妓であるとみられる。官妓は宮廷や地方の官衙に属し、宴会が開かれると動員され音楽や演舞を提供していた。このような歌舞を専業としていた妓女を管轄する地方機関は教坊と呼ばれ、平壤教坊には300人ほどの妓女が駐在していたという。

朝鮮時代の妓女は王宮の漢陽に常住する掌楽院女妓と地方教坊の外方女妓に分かれ、宮廷の饗宴に従事する官妓が足りない場合は地方の妓女が動員された。地方の官衙に所属する外方女妓は、地方で開催される各

種の宴会に音楽や演舞を提供していた。「平壤監司饗宴図」にも饗宴を盛り上げる外方女妓が数多く登場するが、その妓女達が同時に宮廷の饗宴にも動員され、宮廷と地方官衙に活動していた点は、注目すべきである。

それに関連して注目されるのが、「平壤監司饗宴図」に描かれる、船遊楽、獅子舞、剣舞といった演目である。すなわち、「練光亭宴会」には三絃六角の伴奏にあわせて踊る獅子舞と階段の下に船遊楽の公演が準備中であることを示唆する船形、そして鶴舞の鶴、蓮花などが見え（図8）、「浮碧楼宴会」の中には剣舞が描かれている（図9）。

船遊楽、獅子舞、剣舞の演目は、16世紀末の『平壤誌』に公演の事実が記されているが、図像資料のなかでは「平壤監司饗宴図」にはじめて登場する。朝鮮時代の宮廷の宴会の様子を伝える儀軌図の研究によると、船遊楽および剣舞が宮廷で最初に公演されたのは正祖19年（1795）であることが『園幸乙卯整理儀軌』の記録で確認できるという。そして、獅子舞が宮廷の饗宴に初めて登場するのは高宗31年（1894）である。このような事情を考えれば、16世紀末の『平壤誌』の記録で初めて確認される船遊楽、獅子舞、剣舞は、18世紀後半制作と推定される「平壤監司饗宴図」に描かれ、後には王宮の饗宴として取り入れられていったことになる。言い換えれば、地方都市の平壤で催された饗宴文化が、後に漢陽の宮廷に流入されたと解釈できるであろう。

「平壤監司饗宴図」の読み解きから引き出せる生活や文化に関わる情報は、服飾や演舞にとどまらない。平壤府を構成する18世紀の建築様式や船舶など、絵引作成のために今後さらなる検討が必要であることはいうまでもないが、今回は絵引資料としての「平壤監司饗宴図」に特記すべき点として、まず、官衙服飾や地方都市平壤の饗宴文化について紹介を試みたものである。

## むすびにかえて

神奈川大学21世紀COEプログラムの第1班に課せられた課題は、日本近世・近代編および東アジア生活絵引編纂という、図像資料の資料化とその体系化である。今回韓国・朝鮮編の生活絵引編纂の資料としては、朝鮮時代に制作された一連の風俗画を取り上げているが、それは、風俗画が当時の人々の日常生活や生業の営みを最も高い密度で表わしていると思うからである。

その一例として今回の報告では、絵引編纂素材の風俗画のなかでも「平壤監司饗宴図」を取り上げた。この作品は、様式の面から平壤の再建とともに多量に生産された木版刷り平壤図の影響を窺わせ、平壤城の名勝楼閣の修復がほぼ完成する正祖年間、18世紀後半に制作されたと推定される。「平壤監司饗宴図」は、戦乱の破壊から100年後に再建された平壤の名勝地とその建造物を背景に、中央から派遣された新任官僚赴任の盛大な宴会の様子を描いており、個々のモチーフの分析から、登場人物の服飾や建築物、大同江に浮かぶ数々の船舶、平壤地方特有の演舞の様子を迫真的に伝える点において、朝鮮時代の地方文化を考える上で重要な資料になる。特に「平壤監司饗宴図」の宴会場面が、単なる平壤監司の宴だけではなく、大勢の見物人や各種の音楽・舞踊など数々の公演が行われた総合芸術の場として表現されている点は注目すべきであろう。

個々の図像がどういう事物であるかを特定することが絵引編纂の重要な課題であることは言うまでもないことであるが、作品に表れる表現の特徴から主題の選択に秘められたメッセージを読み取り、その情報を通して作品が制作された時代や社会を考察することも絵引編纂の作業のもう一つの重要な課題と認識しながら、韓国・朝鮮編の生活絵引編纂作成に臨んでいる。